

### ヒト、コト、モノをつなぐ場を郷里 郡上で

初めまして。八幡町新町「糸CAFÉ」の上村彩果と申します。郷里の郡上八幡で「ヒトとヒト、コト、モノをつなぐ場」を目指し2014年にオープンしました。多くの人たちに支えていただき、今年の7月で5周年を迎えます。作り手と対等な立場で取引をする「フェアトレード」で環境負荷



①店内写真

大学進学と同時に郡上を離れ、その後10年ほど都会生活をしてきたことが私に「本当の豊かさとは何か」を問うきっかけをくれました。当たり前と思っていた美しい山や川が貴重なものだということ。土地の文化や風習を愛で、繋いできた人たちの暮らしが生きたとある。本当の「豊かさ」がここにはあるのだと実感しています。

郡上は自営業の人が多く、何をすることも地域内で全て事足りる町だと思えます。食に限らず「暮らしの自給自足度」はかなり高いのではないのでしょうか。例えば、糸



②月替わりのスイーツ郡上産の果物を使用。イラストも八幡町のイラストレーター大坪千賀子さんに依頼、郡上はなんでも地産地消が可能です。

CAFÉの床材やテーブルなども県産材を使用し、地元の業者さんに加工を依頼しました。また、地域内でのコミュニケーションも密です。都会では触れ合う機会が少ない異業種の人、幅広い世代の人たちとのコミュニケーションの場として糸CAFÉでは日々、様々な人たちが集います。こうした豊かさこそ郡上の魅力です。これからも、それらを伝えつなぐ場であり続けられたらと思っています。



③毎月第1日曜日(4~12月)には郡上のこだわり農家さんやお菓子屋さん等による「糸CAFÉ」マルシェを開催。

キラリ★郡上人／観光立市郡上の推進

### 明宝小川で特産品製造の後継者として活躍

明宝小川 (小川こぶしの里)  
うのき ちひろ 鵜木 千紘さん



「小川こぶしの里」の代表として、特産品の製造、販売を手がける鵜木千紘さん。(農産物加工所小川こぶしの里で)

「子どもが食べる市販のお菓子は柔らかいものが多いので、しつかり咬んで食べられる手づくりのおやつを作りたい」と鵜木千紘さん。大阪出身の移住者である鵜木さんは、平成25年にそれまで住んでいた明宝良から峠を越えた集落である明宝小川に居を移され、転居2年

生姜やきな粉、豆乳、緑茶など独自の材料を使ったクッキーはちよっと固めですが、このクッキーを販売している「道の駅明宝」では、専用の販売コーナーが設けられるなど人気商品になっており、地域内での経済循環にも寄与しています。

目から農産物加工の事業所である「小川こぶしの里」の運営に加わりました。漬物加工が主となっていた小川こぶしの里で、「お菓子づくり」に挑戦した鵜木さんは、試行錯誤の末、現在までに9種類のクッキーを開発されたことに加え、後継者がいなかった「小川こぶしの里」の事業運営を引き継ぎ、経営を安定させる立役者となっています。

「小川の水や空気が、この土地が持つ魅力がクッキーの味に生かされていると思います。」と話される鵜木さんは、定住された明宝小川で夫の憲之さん、そしてお二人のお子さんとともに暮らしてみえます。元々彫刻家であった鵜木さんは、創作活動も本格的に始めたいとのこと。今後はますます活躍されることを期待しています。